歡喜歌

高田重吉著

下

特41
239

017561-000-5

特41-239

歡喜歌　下

高田　重吉／著

M16. 9

ABF-0347

239

數座歌 下

イ 今迄ハ我が心より目のはいて

ロ 佛陀のちかひをわれ辞義遠慮
老少もみな常なきところ

ハ 行路もはやく信をとりたし
まね親しく萬里の道を志のげも

ニ 人の俗縁でハなにのかひなし
日くに作る悪業ハほあれども
教へを深ればバ直り消滅

ホ　本願寺、法いる深めハよけ也ども
伝ゆかくてしも、何のかひなし
ヘ　愚さにとく、上手ま様くいと人ハ
他力でなひしぞ、自力ハ志んなり
ト　尤も爾を教へを深く学び得也バ
さくに在なげ、て浄土に
チ　智恵もなし、ゆ力なの我なれど
他力を得也バ智者の長あり
リ　理非ちゝぬ、我身のゆる、悪人が
怪を浄土へ　法陀乃浄土へ
ヌ　救ゆゝ行豆腐ま行のまれな也ど
ル　教へ残くれバ金剛心志んあり
猫婦陳楽、理馬脳のにまと、学ぶ也バ
ヲ　伝をもつて家也もゆくべし
ワ　おん生ま、けあり行るゝ我乃脳て
今日ま六字のゆうさ残志ら
カ　美き時教へを学くゆ学のぎんバ
脳れ美又ん、身乃閑しゝ
也也志也くいよまに法の婆れ目ゆ学る
学脳もまやく志んを法ゆ愚し

ヨ　若きこゝろと、なそらう常に、おもむきまゝだらうで、何のかひ乏しく
タ　空しくまゝ、若をいうほゞなすこそも
レ　伝ゞるけ也バ、何ぞかひなし
ソ　蓮臺の上り、往生を願ふ乃も
ツ　釈迦乃教へ、の、伝を聞く人
　　身なだらうで通る若もなひ
　　口百口百の、中ゝ、まもも供も
　　常ゞに、ほ生大ゞ、おもへども
　　不欲ぼんの、ふいつもかまゝ

子　子孫傳乃教ゞまひ也、変なし
ナ　一ゝ有ゞ、伝乃会仏
ラ　何事も、周縁ゝ、のきら免ゞ
ム　不欲ゞ、ゞ也、也よろこべ
ウ　来年ゞ、ゞ、性に、ゝなゞ
　　生ゞ、ゞ、ゝ、ゝ、ゝ
　　賜ゞ、家内中ゝ、ゞ、ゝ
　　教へと、ひゝ、ゝ、平生業
　　歌ひと、我ゞ、ゝ、ゝ
　　自力では也、化力ゝ、田畑

ヰ　ノ　オ　ク　ヤ　マ　ケ　フ　コ　エ

一心にハ未来のことを我がおもふなら
乃機のありて信をゆるなし
無なる船の時節を早く待へくも
自力が入るれバはひまおくれるな
我へ我バ命が深く花きしより
五欲なのこで出意也よ死ぶ
くりくし年をつてハ矢の如し
恥ある子あり、ふらハ子の親
やくくし弥陀の浄土へ参る人
他力の信を花き、ゆるゆへ

彼のしたにいふ言のきれだう
ふれもちハいりもえうしもひ
懸念の命が主にゆるるが
我へと行ひく信をゆるべし
不思議なる我々我へのれ代よ寿合つ
無明に無行で弥陀の浄土へ
十方仏まで出法を我が思へども
五欲煩悩ハ川もかまんを
得とんといふハ己が疑心あり
ゆきなゆくゆる主バ心ゆきし

テ　手に珠数をかけて佛を拝み、
ア　公も奏し、志んのよりも、
サ　数多り、神や佛をあむものも
キ　家財でなひぞ、阿弥陀乃仏から
ユ　經よ、数への巻を学、浮世バ
　　やがてのうちに、伝を浮ぶし
　　機と法と心二つ、ゆ、
　　おさ法るまろ、当世の一公
　　ゆ、片紀ぶ、見へ、
　　数へを法世バ、智恵のなのるさ

メ　縄くもいげ世のうちよ、神のあく
ミ　こうろ猫しひ、来安楽
シ　見て面白ひて寿れる我な世ど
エ　まものひまず、阿弥陀乃仏世を
ヒ　伝公の世世ぬと、いふ報うひ乃
　　猫り自力のふ、ふ残まる世へ
　　探びまて、ろ、ひろ、ろ、る本願を
　　冥きゆ、ろ、で、我ぶものとふ
　　人へも世ろん、ん、ぶ、ゆ、伝世べ、
　　家世もひんらく人も安楽

モ　もろ〳〵の雑じへんを投捨て
セ　まろさぶ公、おもれが信公
ス　若光寺殿いろる心を最も
京　冥加帰伝乃、法、紀あり者り
　　志むろも濁るか我が、にざすゆへ
　　阿弥陀の仏意也我が身をまるゆへ
　　京都の六條さ面へ参りはつ
　　ゑりハ五思ぶ様ぶ伝の冥加

一　一文字書て授我が身ぶ
　　伝を得りゆへ阿弥陀の浄土へ
二　人間の道を知さぶ者むぶ
　　やがて浄土へ往生
三　三帖九和讃を後ぶ写れぶ
　　伝を得ぶ者ぶ乃、をしの三昧
四　臨海波去川まる時もあるも
　　公のおみハ去づむをまおし

五　山法師まづ者すぐあるまゝに冥土へ
いそぎゆきひてもつたへ浮づるし
六　むりくの公乃庵へ佛ゑんが
命り通るも泳陀の善力
七　自力あり世業を投てく
冥土あり名を称へよ
八　さべうひ親子に見せ奴腰巾を
九　照らしたまふ泳陀の光明
久遠より今日迄の此若男
家を浄土へ連れ行きさ

十　十分の力、他力の伝を浮ゆへに
今も亡者が祝てもたんしん
十一　一念に泳陀の教へを祝き浮迄バ
十二　この世ひんらく来業安楽
船ハ山法の土地よ居ぶる
十三　伝を浮ずバもくの三悪
三信を振ひよあるもよくきけバ
十四　自力は善を迄まぐる一念
志んぼりの心ひよ他の世ハ
まれが祝世乃業ときさしめ

十五　十五夜の月にかけめぐらすもかけ先のなひが、扶陀の中秋

十六　六親がいうほどあるまじ、悔んでも

十七　如何さたすひ、あ〜へ〜ら如

十八　色ゑがへる、色のきこを見ぬ道バ

十九　十八の公然の山蔭の道バこまち

廿　糸色　命絶、没　合即　生

廿一　ゑゑ〜〜〜辛苦ハ矢のかし

廿二　所詞もまく〜信を得ぬ度し

廿三　十分ゑあ正ハ所ゑ、ゑ城ゑ返

廿四　ゑの様のたりで此所けゑゑ

廿五　一切のものよ中来、ある由へ

廿六　扶陀の中来、扶く宥度し

廿七　二度三度、ゑらゑ要ゑ要でな紀ゑ

廿八　行詞もまく〜信を得ぬ度し

廿九　懺悔ゑゑ〜〜〜ゑ我が、ゑるなゑバ

卅　ゑ様のゑりで信を得ぬなり

卅一　信ゑゑ、ゑ〜〜〜ゑれバ得ゑ道ゑ

卅二　自力を捨ゑ〜〜ゑけハ得ぬゑり

五十五　此義然、南東西のごとせこれ六字を
冥うずまいて、信ハ法の堂
六十六　紀ゞ、倶舎一変し楽しむも
阿陀乃義へ、信を導ゆへ
六十七　真宗の義へ、此を冥法ハ
生機法ありて、阿陀の浄土へ
六十八　賜も生ぐ、ちもおきりし我心
志やまりあらぬ、阿陀の本願
六十九　孝行の子ゞ、まるハ恵減あり
紀り法ての、信をたしゆ

三十　十人も皆ゞとおりあり
七十一　信ありて、信を法あり
七十二　一法の者ゝ此世をおゆ尽し
七十三　者も行るあり恵しきあり
七十四　逆け者り、此法相ひの我が生で
七十五　おいは免て、信を法あり
七十六　義紀の法あり逆ひ生る
七十七　おゞぎ自来ゞ、阿陀の本願
七十八　信公と、法法ゝ者ゝ者ゝ
七十九　家解ておいれ、阿陀のはから

卅五 業障は、深き高きも、苦にならず
ほとけは弥陀の、光りあるゆへ

卅六 六字をとなへ、唯おほよそに、聞でなひ
いまだとなひて、深く信ぜよ

卅七 真実の、心を我が、得るゆへり
五欲あるがらく、弥陀の浄土へ

卅八 山よりは数への、御名残惜しものも
まだの暇でなひぞ、弥陀のみから

卅九 香花を、とりそへて浄土へ、行ぐなひ
いまだと聞ひて、信残得る人

卌 十種の、利益のいのちが、御信心
聞けば聞ほど、心よろこぶ

卌一 一代り、教への数を、聞ことも
聞ひただけでは、何のかひなし

卌二 日輪の、明らすの、ひかりはたしかなる
夫をとうまがふ、人もある也

卌三 けんだいも、覚へらまぬしなげなよ
覚へておひの、数へある也

卌四 信心を、先りたてるぞ、頼みたひぞ
無常を知に、まだが済なり

四五　世若芳の姿を、あがむる道ぞ
いうあるべうなる道
四六　六つのうき、教へ、おもふ人みな
四七　自力のさく作、あてにすゆく
四八　伝心の姿、こゝいふいうぐゆき
　　冥ひろく春ぶ、おもれの伝心
　　やくくと、教への道を、おるせども
　　儀くこゝ道ぞ何のうひなく

いろ〳〵の、書に心を、まうけ道ぐ
おほきに教ふ、書世の一心
光少の、油新の、出来数世界あり
所時も早く伝を、浄ぶ
はまの、ぬ紀八、乃命北世のなきい
所時を早く伝を、浄べ
に　西乃親、東の親乃、れうげより
おろのおまを、伝をうあり

ほ
ね
の
ち
り

おもうに、故聖人の仰せ候ひしの出で候ひしに、たとへば、師匠一人より、千人万人、ともに同じ心なれば、ひとりもかたがたの人々、みな、仏の御弟子なり。されば、親鸞は、弟子一人ももたず候。

とかくの理をまうすに、ちからなく、ひとりの人をたのみまいらせて、念仏まうすばかりなり。

如来、聖人をつかはしまして、親鸞が身にあてがひて、まことの大慈大悲をしらせまうすなり。されば、親鸞が身にとりては、ただ、如来の御恩、報ずるばかりなり。

よ　世の中れ、知識の教、正直なり
たひらく　まことに、教主の仰せ、仏
たし　凡夫、煩悩具足の身なれば、
教へと、守りけば、仏法、滅びなん
れ　乱義をば、川も山も、思ふ
う　真機の有りて、仏法、滅びなん
き　世のうちは、無事の風ぐさ、
つ　序ぬ早く、仏法、滅び
川も山も、世の中は、住まべし
教をあんらく人も、ひんらく

枚　念仏を、称へ、滅ぼすれば
法陀の恩、利益の仏法、
な　なんまいだ、利益、
守ひらく　まことに、仏法
礼拝をいたして、
守き　滅ぼすで、法陀法
六ツ　儀、他法の教
五欲　なぐ、名聞
う　ふ、滅ぼ、
よ　こと、教主の仰せ、仏

わ　いたつらに、年月をすごしてあげくは
の　法のみち、石田孟津の比、
れ　おくれをとこ、凡夫の知恵の道理をもて
く　くやしく、此心をいさめずに
や　やすらげて、我へくだる此六字を
　　まことの思に、信ハ得がたし

ま　法華ハ、なを、仏滅後の末法
け　末ゝ、まことの、妙法蓮華経
ふ　伝を得ん人、誰かあれ
こ　ゝの、姿を、見る人、
に　こゝの、内を、法華ハ、因位
　　得がたく、ひしいの、
　　ゝ、ひてよろこぶ、更ゝ、信

て　賜ふの、利益を我が浄土へ
あ　又欲なげくで阿弥陀の浄土へ
り　ありがたく有て浄土へ行くでなし
き　又欲なげくで阿弥陀の浄土へ
ゆ　信仰のつうひのおうげ所なに
き　まろうな家ゲ伝を浄土あり
　　冥者ばかり教へのはなと宗浄土バ
　　宗ばかり居なげく、こてろ浄土より
　　浄土なり者、阿弥陀の照護なり成ま
　　土欲なげくで信後相續

め　同で居ら心ありおひよ阿弥ぶハ
　　いいもかまくり奴、伝乃善佛
み　見へもせぬ阿弥陀の浄土を世ま
　　よ阿ぶまつろ、親鸞案しいい
し　親如来世土へ出世下けくも
　　又欲乃腹へ伝の種まき
ゑ　浮ゲ者ひくいふく仏を拾ずま
　　冥浄なりの、博名を私へよ
ひ　毛ろかへく仏家でなひ
　　阿弥陀の法くゲ、年りくなへ

も　もろ〳〵の仏ハ我れ自性あり
世　誓願ハ世世の命せと可得也バ
こゝに居ながら、仏浄土あり
す　まぐるまくる無量寿の風と、きも稚よ
ま　まこゝの信乃、種ゞ生ずる
京　今日迄ハ宝ひ出ての四六字を
信じか祈さハ、我ゞ行やまり

右衆生、速び心を
たの通り
いつも仏に
祀祈する事あり

天朝乃、浄養人ゞ、行ゞ人ハ
お祈かな我ゞ信と事よ
神ゞの、ちりを我ゝ、浄ゝ成よ
朝夕拝む、心事ハ迄ハ

佛けより、深ひ慈を深く存ず
勢タあむ、公ます也ず
正直の、公の教こと尊めれば
我也ぐ善也乃、よ義く公法
火乃ゆと常ま大ゆをかける友
勢タまぐむ、公ます也ぞ
師直より、義への心かげ有也ハそ
親タ、心わすれず
親の悪い川も公よ、男ゆへ
勢タあむ、公ます也ば

家内中、九く日暮しいたまるハ
義へをゆひて、伝を深ゆへ
兄弟ハ常に中能く、男ひて
いけもかまる、公正直
子供をバ常ま大変をかける友
亜常ぐ来ても、あこで寄ぶ
費へ有れよ、ゆ人を運ぶ也へ
いけもかまる、公ますやう
老母をば、廣く世渡ハ生まるハ
いたもかまる、ゆ、六く海正直

此ノ書ハ法陀の今世乃
浮き世を
今くに人乃
易ヤスく知シ世ん

明治十六年九月十日 版権免許
仝 年 仝月 出版

著述兼
出版人 福井縣平民 高田重吉
越前國南條郡武生
楠町七番地